

「特集」

# 価値の由来、表現を支えるもの

——経済、教育、出版、労働……

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の蔓延は、様々を再考する契機となっている。文化・芸術も例外ではない。制作や発表が以前通りにできないという事態はもちろん「感染症蔓延の危険性と制作・発表のどちらを取るのか」といった判断や、文化・芸術とそれ以外の産業のあいだの区分、国から文化・芸術への支援の方法の検討、あるいはそもそもその是非など、多くの問いを (大きな代償とともに) 生んでいる。

とはいえ翻つてみれば、こうした状況は、新型コロナウイルス感染症蔓延以前からの世界において根深くあり、ここ数年で急速に露呈しつつあるものではなかったか。

「あいちトリエンナーレ2019」における展示中止・再開や文化庁補助金不交付、「日本学術会議」会員候補任命拒否などといった、文化・芸術と公金と政治性、自由をめぐる問題が繰り返し注目を集め、サプスクリプションやクラウドファンディングなど芸術表現と消費の関係を大きく更新するようなアイデアが次々実行されている現在において、私たちは、文化・芸術、あるいは私たちの生そのものを取り囲み規定する経済やメディアや言語、さらにはそれらの上で激しく行き交い衝突しあう「価値」について、あらためて考え、再定義していく必要にこそ迫られているのではないか。

以上のような観点から、本特集では「表現」の現在を、それを支える様々な下部構造や、そこで生じる「価値」の側から考えてみたい。

表現過程が「労働」として、作品が「商品」として評価されることを介し、人々が生活を通じていくことは、文化・芸術にとってどういう意味を持つのか。そもそも私たちの生は、社会は、文化・芸術に何を期待しているのか。

国家・企業・個人による芸術表現への「投資」にはいかなるかたちがあるか。そこでどのような価値判断やロジックがありえ、またそれらは文化・芸術にどういった規制や助長をもたらすのか(「検閲」「表現の自由」「政治的テーマの選択」「文化の保存・発展」「ジャンルの変容」, etc.)。

私たちが何かを表現したいと思い、表現し、それが消費されていく一連の営みは、どのような経済、形式、言語、価値観に拘束され、あるいは喚起されているのか。そこで生まれる「私」(の意思)とは何か。公共はそれをどのように支え、制御し、拮抗しているのか。

また、これら一連の問いは、近代化にともない個人の表現と公共に向けての大量生産・流通を両輪に発展してきた出版(業)、ならびにその下でかたちづくられてきた「文学」という「ジャンル」において、はたしてどのように変奏され、機能してきたのか。

文化・芸術を、単に市場経済や形式・構造のもとに一律に還元するのではなく、また、「文化・芸術だから良い」「好きだから表現をしている」などといった思考停止に陥るのでもなく、人が生き、関わり、考え、手を動かし、営みを共有または孤絶しあい、過去を顧み、未来へ続けていく、具体的かつ雑多な手段として用いていくために——さらには「作品」「作者」「制作」「消費」「メディア」「自由」などといった概念や単位を、かろうじてでもより良く用いていくために——いま、価値の由来、表現を支えるものたちから考えよう。